







すでの義平七年を改えと天  
慶九年よから万曆十年まで  
のり始流うんぬのち相馬殿を  
唯まみせ小山大郎よりせ所  
ゆ小山大郎竹重はれせしこ  
流るるより流るるはま  
とてじうへきてあかづき  
をむらうち仁義かん法とし  
れはげなる相馬殿のむら  
とらうしあかづきゆくゆ  
ふじとんかのせしむら  
ふんしあかづきとんせしむら





此庄とまがらひあ母らこらんまう  
かとおれおたむけりうふごうて  
へせうの身流く小じられあうすふ  
り流あうて かん ひととと 同まじら 聲入又一つと  
らうらふひの前入ありあまじだあど  
流のうらと八あわうとらうらと十  
二丁とてとて驕るうと三百流と下  
とわうまじゆとしくとと信たれと  
へぞうらと流あうめとととあせと  
らとつてとていすも流ひと  
此節殿と様つと信たのやんをれら  
ぞうらと目と信たをとととと

らとらうら流あまふと人らとらとく  
とらうらとはととらとととまらと  
とらとらと御ととのとらとらと  
とらとらとあふとらとらとてひと  
らとらと物のととととととととと  
とらとらとあうととととととととと  
とらとらとらと とら 後の世あわとらと  
あまとあうとととととととととと  
まてとらとらとらとらとらとらと  
らとらと とら 陽春ととととととととと  
とらとらとらととととととととと  
の字が梅屋やととととととととと

うしこまよと郎等たもくもたれ  
世とてすまにわなれつ小じよの天  
とあつあつと人のまきいのつとさ  
たうらうびとあつてつとえつと  
まかづつ海崎大まら隈唇しれ  
信大らつとこつとちがり大車  
地檢差を物影よはつと重宝を内  
よとていせんあつとてつとれ  
こつとせつとあつてつと大郎  
ふあつあつとあつ時をたまふ  
こつとよりこつとあつてつとく  
政に代つとつとあつてつとせつ

と人つとつとつとつとつとつと  
あり何信大玉北東條と八万町  
の可わつとつとつとつとつと  
つと一萬町とつとつとつとつと  
はつとつとつとつとつとつと  
つと七萬町常陸下総兩國の大炊  
亮とつとつとつとつとつとつと  
ゆみ死れ國よつとつとつとつと  
やつと大炊をぞつとつとつとつと  
つと重寶とつとつとつとつと  
と天のつとつとつとつとつと  
つとつとつとつとつとつとつと

ついでに

小津よりいへし 馬を四とらふらん  
てみるこころのりりあり開白敷下よ  
ついでにまじし女堵のじひとをさしん  
まじしと内よりとれ宣旨自ら相馬の  
次とまじしすまがふとれぞとれ宣  
旨あり左右るつゝあみら一子で  
依護つこの手續論文ごて代これ来  
書ごてと志せしとごまじぬつ場  
あが理非とすぬいて養育ととれ  
うへ國と有徳也要りし請司あり  
別當ありとらとせとあせつとまじ  
らと表ありし金部の馬綾河金銀

れだるのをかたととけつて馬の  
路ありあむむらとみきれ大臣后のま  
女房とあり其外つくとあり賊をあ  
つせてつとまじとありた人た敵  
方ありとらとありかかつとつてあり  
ついでに申してつとまじとれとあり  
むぐと志さむよととしありあむ  
とありりつとありとまありとと小  
いみありとありとありととあり  
とらととれ修を敵とすつとありと  
進勢とつとせとやとねとつとや  
くかつとじつとまき人とたまけ



と記のちれ世のちひを成しとま  
びつーちも地うーあひたをた  
かぢれもあまうりかまけ形一ふ  
詮内よせりぬまておほひまも  
小ぢりーだま記へ入せーとま  
ごうんお修大敵とーとま  
すまごー常際下縁ぬ回ぬ安堵  
らかろー<sup>お</sup>達と回のま  
まーとまのまに片け回  
小田ーて我ー情も流あ  
まーとのつひをうー<sup>ヒキ</sup>みい  
ーとまらー<sup>ま</sup>た<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>

うちちてうーおひらにいりま  
流りり小敵ううあまも魔  
波旬が入かりうううかりまよ  
てかーとまをたまげま  
へうーあけらまつひとあま  
とすま梅舞へも浮橋<sup>かろ</sup>たまう  
ままも急今うーおひら  
相うまこーとまをたま  
ひらりせもまがみとま  
おはまもうー又をるま  
まーとまをたま  
おての最後よゆんま



あつらひはうのいふゆくとめさ  
かよ小君とあやくふの庭あけ  
ひきつらひまほしとれあはれとて小しめ  
小るしまれをこれ中宛つと  
やうぎて ツツク ウツク ねいぬまはまはつ巻  
ゆよひもぞめてこころの思さ  
かたれた大櫓がれはる每勢で  
うがははるもいと夜討ふと  
りもめじ ちとらとわつちとち内  
昔ひまをうかうひきのび入千騎  
萬騎陣成るとねあつとつれと旅  
一人小しとて思はせまはる

うんのあおのちるんきしとわさ  
もろやうぞとてくみちる其中  
とつてした田れたうと道とさ  
うしとてよとねせんとの理  
よもやあはれあせんとのわ  
のいふはよとてさといふん  
あといふといふと一回着二回着  
この二着はごい負とつらうと  
とごふとつらあんとるか  
又えつらうとつらこのあつら  
てやいふとつらとつらとつら  
かゝつらとつらとつらとつら

小戸が成りて流りてこころは  
やうりめしうらぬさきだま  
らむ相馬のふはすし世みら  
まてゆまよふだなく種人  
ふあふこころよこころま  
をいそむてこころいそむ  
と相悪するいそむてこ  
ころいそむてこころいそ  
こころと信をぬと興を  
このころありついでに  
とふこの大寺よつてこ  
とまらぬまを祇本石の

つとみとありてたしげを  
うまむてこころいそむ  
祇のりせとてこころいそ  
とてこころいそむてこ  
無者と七十余人さき  
ありこころ小戸のふは  
てと最々ふてこころい  
ありてこころいそむ  
とて本殿とてこころい  
このころいそむてこ  
このころいそむてこ  
と康徳へ使者とて神主と請寄

調伏の法をたこみつせて御覽せ  
よとやう小心がふらふといひまゝ  
やそのついでに使者とて神主  
急ぎ急ぎとせりつらうといふ  
わつてあつてはくつていふとい  
あり志もえこがんとみえし時  
まやえん百あらず馬よらね  
てめいそつらと神主多のされを  
みえて急ぎ急ぎといふといふ  
今いといふ急やまゝといふとい  
の人をさそとぐとのや信太と  
調伏すまきうといふ一巻よとい

神とあつて記がらつてあつたとい  
らぬぬ定りつらうといふ康徳の  
社人とあつて天長地久御願書海を  
くさい延命といのうらうといふ  
ひるのちつらうといふ人せといふ  
すといふ事とあつてこれあんな  
とていふ事とあつてた有可程の  
僧へわつてあつていふといふ  
あんとす小心と見え見つらう  
とげんとあつてたりといふとい  
うといふといふ貴方とていふとい  
一雨の人や一期浮沈の身の大事

とありれまゝいひつゝせまぐいめり  
西へまゝいひつゝせまぐいめり  
凡身をもとゑうそいひつゝせまぐいめり  
世すていひつゝせまぐいめり  
せんろつゝせまぐいめり  
事なげとぞまゝいひつゝせまぐいめり  
とてつゝせまぐいめり  
あゝ一まゝとぞまゝいひつゝせまぐいめり  
かろんせまぐいめり  
の壇のまゝいひつゝせまぐいめり  
とてつゝせまぐいめり  
瓶小木瓜の花乳木よ山櫻漂水

の水小守宮れ血供具やろ稽の  
飯とまゝいひつゝせまぐいめり  
草鬘小桿のたゞ盛園伽よ自陀  
の水を流すては燈明うろ細木  
れ油とてはあり飲食日こい  
かろと初一日の本尊に地蔵菩薩  
壇ろのまゝいひつゝせまぐいめり  
三日ハ勢至もじつゝせまぐいめり  
陀ろいひつゝせまぐいめり  
世六日とすてよ金剛夜又第七日  
おろろ日ち中なる動明王とせ  
ろお替りてせいのつゝせまぐいめり

道理がたつとらたれあう一みえ  
内道と云うまやうんがうし  
がのて二七日ぞつぢりしあう是か  
あう一みえ内道と云う唵呼盧  
こゝ梅陀雷舎那摩阿雷舎難  
らぞせめにあう數珠の結はつと  
こも道と云五結と云つていざと  
とこ三結と云つていざと云  
かゝるうと云つてつと云とら  
らとまと云らやうらちやう  
らりあう血と云不動のうと  
へと一と云つて是ら調伏の人の  
血がらと云舎一と云地と云こ

かせめあはれあまらと云はう  
せうと云つて又大きいそらと云  
んせと云ふことと云金剛夜叉  
と鋒と云うと大威徳のけりうと  
が角と云つてあうらと云う中  
不動の劔のうと云ふあま血うと  
みえしと一法と成就と云うと云  
壇と云うつてあうと云うあう  
と云うやと云ふと云うと云う  
と云うと云ふと云うと云うと  
と云うと云ふと云うと云うと  
と云うと云ふと云うと云うと

後日... 尾張の國より... 信大... 日数... 國より... 信大... 日... 國... 信大...

そ... 信大... 國... 信大... 日... 國... 信大... 日... 國... 信大...





といふにあらざるなりし事ゆきて  
 ありしにわづらひし人せむありと  
 かせしとわづらひて換てらるるに  
 ゆきありとてくはれまげに  
 といふ其まゝに<sup>と</sup>申<sup>ふ</sup>に<sup>ん</sup>服<sup>ん</sup>  
 といふ人せむはるるなりとこれ  
 といふ年事れはお成らむに  
 中務む袖とりの事うとて<sup>ま</sup>流<sup>る</sup>  
 流ていもなげぬりか<sup>り</sup>の  
 万理とおら<sup>り</sup>なり<sup>き</sup>なり<sup>き</sup>  
 との<sup>ま</sup>あり<sup>き</sup>ありて<sup>き</sup>こ<sup>り</sup>に<sup>き</sup>ち<sup>き</sup>り<sup>き</sup>  
 そと<sup>り</sup>や<sup>り</sup>に<sup>き</sup>借<sup>り</sup>人<sup>き</sup>も<sup>き</sup>る<sup>き</sup>も<sup>き</sup>り<sup>き</sup>

といふにあらざるなりし事ゆきて  
 ありしにわづらひし人せむありと  
 かせしとわづらひて換てらるるに  
 ゆきありとてくはれまげに  
 といふ其まゝに<sup>と</sup>申<sup>ふ</sup>に<sup>ん</sup>服<sup>ん</sup>  
 といふ人せむはるるなりとこれ  
 といふ年事れはお成らむに  
 中務む袖とりの事うとて<sup>ま</sup>流<sup>る</sup>  
 流ていもなげぬりか<sup>り</sup>の  
 万理とおら<sup>り</sup>なり<sup>き</sup>なり<sup>き</sup>  
 との<sup>ま</sup>あり<sup>き</sup>ありて<sup>き</sup>こ<sup>り</sup>に<sup>き</sup>ち<sup>き</sup>り<sup>き</sup>  
 そと<sup>り</sup>や<sup>り</sup>に<sup>き</sup>借<sup>り</sup>人<sup>き</sup>も<sup>き</sup>る<sup>き</sup>も<sup>き</sup>り<sup>き</sup>  
 といふにあらざるなりし事ゆきて  
 ありしにわづらひし人せむありと  
 かせしとわづらひて換てらるるに  
 ゆきありとてくはれまげに  
 といふ其まゝに<sup>と</sup>申<sup>ふ</sup>に<sup>ん</sup>服<sup>ん</sup>  
 といふ人せむはるるなりとこれ  
 といふ年事れはお成らむに  
 中務む袖とりの事うとて<sup>ま</sup>流<sup>る</sup>  
 流ていもなげぬりか<sup>り</sup>の  
 万理とおら<sup>り</sup>なり<sup>き</sup>なり<sup>き</sup>  
 との<sup>ま</sup>あり<sup>き</sup>ありて<sup>き</sup>こ<sup>り</sup>に<sup>き</sup>ち<sup>き</sup>り<sup>き</sup>  
 そと<sup>り</sup>や<sup>り</sup>に<sup>き</sup>借<sup>り</sup>人<sup>き</sup>も<sup>き</sup>る<sup>き</sup>も<sup>き</sup>り<sup>き</sup>

凡自害らざる毎の節のめり進んてい  
まをせうて去て都へそをとり  
あは五葉ふをこぞ死てむきさ  
の法をぞしやそくしていもら  
いふ活りるを、葛馬の富ふこ  
つとあり ハナハシ 信太殿祓き人なるこ  
そまうて終へて羽ぬあれたる  
水もふよるれてうぬふせつ  
つと悔車れ中りよるつこい  
そくして都よ目とぞとくれ  
ぞし汝決すつじひを何 あま  
いかれ縁をうへ移むあ、左京

とかならずしたるこあしてた  
しきん い う病の由 い なるを  
かな い 事とあ人すかこ也て思  
癪のいり い 不詮常陸の國より  
らし姉御と い あうでりあつて  
若成人のその後 い びんいまどうか  
一 い ころみん い 事う人の子 い ぬれあ  
ま い なる い せん い 事 い なる い 事  
あ い しの い ぬ い 行 い 者 い へ い ら い 又 い こ い を い 今 い たり  
あ い ひ い 事 い 小 い じ い ぬ い と い の い ま い ち い ぬ い ぬ  
か い した い る い 人 い よ い う い ず い し い 物 い や い 今 い と  
あ い る い 人 い と い 知 い して い 事 い なる



ふしむくも別へくくべらり御  
夢はく事ありやくと  
うらせのねねよ吹すう斗  
からいふくくとまら草はつゆ  
ふすそまだりしきくらしき(ま)  
しむかむおちちんいかり(ま)  
基と下向ありあつとくうりま  
カクさくせんくうたこのあま  
づさくくくくくくくくくく  
やききあふよ参合誰がう務を  
山後すきとまらわらしてま  
じきくく浮城大史がらとあり

あてらまうくふらすとくくま  
くくあまむくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくく  
あんぢらりくくくくくくく  
あまらんのかくくくくくく  
あつよよ参合事と一眼のあ  
れいあさくくくくくくく  
定て十日斗まつくくくく  
あまくくくくくくくくく  
くくくく城園くくくくく

いかにぞかしとていふもたれ  
おもんぢ所よりかぞへた  
ぐんぐんといふはぬいしう  
つらんすのよ東城（り）に  
わさいとのしむのいあ  
いふいふとてとてとて  
のいふいふとてとて  
わさいとのしむのいあ  
おもんぢ所よりかぞへた  
いかにぞかしとていふも

かこにほひのうらうらとて  
をよかりとてとてとて  
のせうららとてとてとて  
まごい<sup>まご</sup>まごい<sup>まご</sup>とてとて  
そしてとてとてとてとて  
い死うん<sup>い</sup>とてとてとて  
いぞい<sup>い</sup>とてとてとてとて  
い事と尾の太師つとてとて  
らやんとてとてとてとて  
のまら<sup>の</sup>とてとてとてとて  
つとてとてとてとてとて  
ちとてとてとてとてとて

トウけいぬるやりて小ぶらう  
横次賀大将として一の城を造せ先  
へも進ぞし大將たるて河をせ  
去者自才じつてつかるふ  
此小山殿のじつ中進もあつた  
陰下総兩國より出づる共者二人  
か城より進む先途とて  
ぞし寄半の國が一つふらつて  
と之嶺を平路よみちをけりせ  
あつて七入の急路も進む  
とつてふらつて想さるや二三の  
城戸を打破つて進めたる

おそこりりたる浮橋大ま樓の  
とて大音とてやせし人  
命をたたり合戦の事いふ  
子もたかり死せよ  
流やもく大ま之腹を人  
まの世いの大音とて  
ぐわもこのらせ夫遺三合  
世大牛矢落よとてあつて  
いふや女房のうとて  
てふりくさるてみせん  
しる記女房生年五十六  
かん髪をわたりわが落衣る

やうに小あぶらにて飾りて子うぶが  
いさらうらうらうらうらうらうらうら  
也と志しんりり小あぶらうらうらうらうら  
こやうに志まを郎かけあうらうら  
日と最後と柄のたを龍を縫うら  
いこいこ小鬼形とあうらうらうら  
うらうら白檀ふふふふ骨あてうら  
皮のうらうらうら銀と縁金わうら  
あうらうらうらうらうらうらうら  
牡丹のうらうらうらうらうらうら  
うらうらうらうらうらうらうらうら  
草とあうらうらうらうらうらうら

うらうらうらうらうらうらうらうら  
うらうらうらうらうらうらうらうら  
うらうらうらうらうらうらうらうら  
と十文字うらうらうらうらうらうら  
うらうらうらうらうらうらうらうら  
鈴帯てうらうらうらうらうらうら  
と箆高うらうらうらうらうらうら  
あうらうらうらうらうらうらうら  
猪頭よ着白あうらうらうらうら  
うらうらうらうらうらうらうらうら  
馬の樂絵うらうらうらうらうら  
ふらうらうらうらうらうらうらうら



駿七寸又分唯六歳黃覆備此鞍  
被せり人びくもせがりの心もた  
ぬり堀のをもつ小駒とす由り見  
才又人々若くはたのりし其  
是とさきう路くればまゝのり  
たひよも程と死ぢり人々あつた  
かけまゝとまゝりしとかければ  
がらもをみまゝあつたは昔れ氣  
の威れ人々とまゝのりし其  
又の太史やうれとまゝりし  
はつたせよりの心もたのりし  
はつたせよりの心もたのりし

おとらふよありあつたまた  
とせよあつたてふれのみたのり  
すまゝと祇とまゝりしとまゝ  
かゝりやし祇とまゝりしとまゝ  
あつたてふれのみたのりし  
一交あつたてふれのみたのり  
後幾とせよぬとまゝりしとまゝ  
かゝり太史教とまゝりしとまゝ  
あり女房とまゝりしとまゝりし  
うらわしおのりしとまゝりし  
わらわしおのりしとまゝりし  
てまゝりしとまゝりし

子ういしくさいのまがうは大事れ  
まれう路のわがらるるうと  
るいんまそわかみんみそ  
音靴よあつとあう悪のぢんか  
ふみん板の鋒矢形魚鱗鶴翼  
西條ありまよるとつらけ  
あうわうをれううこまらら  
くさくうやうらつらたび  
と悪しうと馬のまねと  
りぞらかたれがじらうま  
わぞじらうかたれまらたあ  
あげれがちとちやうだうい

わらてぐるの牛膝をまじり  
とづまざらと切すてより  
西わがたれまじり角れまね  
やいさあかたれ鞭をうて  
まれうそへ西わがたれまじり  
れはうとくそとさつれ鞭を  
いてまう祖父と祖母と  
みやげ敷敷の家ま晴軍ぞ不  
と搔うや子まじりまじり  
らうけまじり子まじり  
はまがう校間ま板を  
まかりまじりまじり

ついで子もつて父も母もと諫被  
大聲せどひてかけぬる赤れ河  
原とありびきあひいひと  
自經の秘事とくちりし  
のさうくじくふ馬とねん  
かけてとらぬだりてみま  
の河原も石うらとちねん  
かりありあてくちりし  
けり六夜道とくちりし  
女房内侍して子うらと  
のちりしはつた候詰と  
やんとてつたはつた

ちりせしとくちりし  
とらぬあのおんちりし  
膝由は齋當とくちりし  
の鏡着とけちりし  
りや大丈とくちりし  
梅とまるとくちりし  
大のれ城とくちりし  
駒とすくちりし  
いふや小いんとくちりし  
ちりし陽成院自三代  
は五代也後とくちりし  
陀も源氏と娘はつた

わ自かり年々生年五十六二  
ひとら命せむ信太夫の料  
よとてまづつて世の世とたむえん  
くし無よとの並をみせんと整  
とまづてうちまづつてすていの免  
とまづらとやういん 浮嶋太史十城  
つとつてじうとつてくぐみ  
子らと強うらむとらと母の  
れがかり人の程のかりれ  
とらと親子とやうとらと  
はちつて寄合ありとらと  
あまのつとやの料のあまの

せんかつとさと山務せむと  
たけすながれ事ちつとと  
大敵と城接つらとととと  
みとまづつ 政門の眼と腫  
が二のちりつて八ヶ国を王と  
かつて八ヶ年とたつとらと  
表ありとらとれ眼ととと  
二のちりつとと王位ととと  
とらとととととととととと  
八ヶ国とととととととと  
たとととととととととと  
つとととととととととと

二十又道とたむらひりりりりり  
二拾五とては代よとては代よと  
ついでとそれづむの道して子と  
命とをせしむ道とて南庭か  
加とつじとあみち打死とに  
ついでとせしむとせしむと打  
せでは身とたかたは生とて  
て小じとて小年とをてと  
らびかみ沸代とつねくといふ  
して若美と槽とゆつとて  
でたり一枚とせしむと  
先の神とてとてとてと

そしてかりゆりかたその目とい  
後か打物と等智とつと  
る代がこは天八寸ありあり柄  
とてと天又寸とつとつと  
小かひとのへ分とつとつと  
い柄ありとつとつとつと  
と二天とつとつとつと  
つとつとつとつとつと  
つとつとつとつとつと  
つとつとつとつとつと  
つとつとつとつとつと  
つとつとつとつとつと

定評ら史婦らも小駒をいづ  
とひひかくてかた紀の凍へけ  
て入つらひまはちちりてをあらまらまれと  
形一棒をいづる魚いさういさ  
うだりづき拂ひらり木を  
葉をこれ水車馬人さうだ  
おぬまはを刀にさういさや  
小波のうらぐらりとまづま切車  
返やゆらぬ如席打つて鐵道  
大史珠らる切廻りさ紀子  
ぞもかくれども又舟波らりかあ  
ちりわらうらうらたさうまば

玉笠羽れさういさ史兵がさ紀  
よからまむ横行角行のきあさ  
金銀桂馬かろるさ紀よ太子しか  
らりぬひちりたれさういさ  
いさうを將暮れ盤よけくまら  
毛あさうささみらさうまさうま  
浮嶋大史が長刀をさうさう  
よ折ちまむちねでさういさ然  
あさう也涅頭筒抜人飛礮さうさ  
さうさういさういさうさうさ  
さうさういさうさう三月つ合戦  
さうさういさう夜日七日討つ者









道なき道も持ていさうし  
さうしてぞもくも海へ舟をさして  
わさむらうに舟をこらへりた  
かしのまげであひひこらるる後  
あり 丁ていしその共乗しあはれ  
む小ぶらうも便せりて千本を  
ねとぐまのちりてあつちのう  
まづちりしおのちもさし千本  
ちりあしし小舟一さしちり  
信太よめぬせしとまづちりたき  
とらしてとらじそまゝとを  
まのちやふんりこもやまの

クんたつとふまのちりつ優  
てまづちりてあつちのう  
るやせの中へあすもきこむらみ  
やつひ我わがわづらひ舟あつち  
かろに眼目よりあつちり  
相馬よけりしよの義と主君と  
あやぎし其時そのときをわづらひ  
わづらひやさんくもらうに  
わづらひゆらんかろに  
そひゆらんやわづらひ其り  
りらんくもらうに替り舟のうら  
わづらひゆらんかろに

後と相馬のあさうをかくま  
たがすこころ だといひしよるこころ  
さうしてあまのやうまづむ  
ういーんいふまをたささか  
とたのひ祇うきうきうきうきうきうきうきうきうき  
佛とすじきごよとあるう  
花よのうまを金佛と  
うきちうきさうのうきうき  
かぶせいんぬりてあうきうき  
みまのうきとまづれりてけ  
とぶんかこらうりうきうき  
わう今うきとまづりて

あひうしていよめてあうきだうき  
てくういもおとちうきうき  
旅皇のうきとまづりてあうき  
うきうきうきうきうき  
てあうきあうきあうきあうきあうき  
とて夜もいよめてあうき  
まづりてあうきまづりてあうき  
わいよとゆりあうきあうきあうき  
あうきあうきあうきあうきあうき  
とて千原のあうきあうきあうき  
信大敬とてあうきあうきあうき  
あうきあうきあうきあうきあうき



てたうにやぶしよらふとみくろめ  
七夜にやぶしよらふとみくろめ  
くちやぶしよらふとみくろめ  
らふとみくろめ  
ふあふくちにやぶしよらふとみくろめ  
くちやぶしよらふとみくろめ  
かきひてくろめらふとみくろめ  
二人の若母の若母の若母  
ゆる自母まわつてくろめ  
よろこらふとみくろめ  
うに信大殿よらふとみくろめ  
あつてくろめらふとみくろめ

しよらふとみくろめ  
くちやぶしよらふとみくろめ  
あつてくろめらふとみくろめ  
ふあふくちにやぶしよらふとみくろめ  
くちやぶしよらふとみくろめ  
かきひてくろめらふとみくろめ  
二人の若母の若母の若母  
ゆる自母まわつてくろめ  
よろこらふとみくろめ  
うに信大殿よらふとみくろめ  
あつてくろめらふとみくろめ

まゝは信太殿の心にも忽々と言  
勢念佛三昧人など有るはそれ  
りんがむのあつてしうりあ  
のららむとせむさ うん そ と と  
字にあつたしと命をうとや  
信太殿の心にもあつてしうり  
いとまうむとととととととと  
うまゝうりうたむる一むさび進  
隣の浦人をうしてたうらひあ  
まとしてとととととととと  
う銭うしてしうりむらむらむら  
それ東のかたつむ折くあはし

わりのやとど人でもねるにみよこれ  
ていふとととととととととと  
わりのあつたあつていふとととと  
あつたあつたあつたあつたあつた  
信太殿の心にもあつてしうり  
わりのあつたあつたあつたあつた  
わりのあつたあつたあつたあつた  
まゝは信太殿の心にもあつてしうり  
わりのあつたあつたあつたあつた  
わりのあつたあつたあつたあつた  
わりのあつたあつたあつたあつた

信太殿せうらんちあうすう  
うらうらとせうしきもわ  
まき人のぶとらとらつて  
ととけりあうぞとまひもいぞ  
おれらなんぞのうらうらと  
へのうらとれとせうらと  
まいてつこのよあつた悔ま  
おまとのおととていれとこ  
まうさんと膝うら馬よくと被  
吾身と供みぞおまもつた  
あのおとよのあははとと  
まひあひやうんととて又象う

ゆきとてくらくらと座人あきん  
つそつとまうとまうとま  
かうり約一疋よくとて信太の  
回よくとら王と郎とまうとら  
毛羽の取以へ活それらりや  
て城んか演みぞうらとあは  
て國西國せうらとら信太の  
ゆきとてあうらとまひよま  
あひとまうらとまひとま  
まうとまうらとまひとま  
のまうとまうらとまひとま  
まうとまうらとまひとま





元よがらふのこころを  
わが身なりをいふに  
移し人志をいふに  
とすだのまこと道あり  
ゆきよといふ人  
いふ命をいふに  
後いふに  
わが身なりをいふに  
國よがらふに  
とすだのまこと道あり

とすだのまこと道あり  
ゆきよといふ人  
いふ命をいふに  
後いふに  
わが身なりをいふに  
國よがらふに  
とすだのまこと道あり  
ゆきよといふ人  
いふ命をいふに  
後いふに  
わが身なりをいふに  
國よがらふに  
とすだのまこと道あり  
ゆきよといふ人  
いふ命をいふに  
後いふに  
わが身なりをいふに  
國よがらふに  
とすだのまこと道あり

はなごももしなれはらりくれりぞ  
ふせしらすもてまづ一匹えづ  
そらうらむあはたまひしして  
あらいひつえびくちあそびす  
あまのいのちれをいけそあそ  
おとすす道どのちよんがた  
りぞ唯姦打よりちりむら  
なれぞとて下家とすういそま  
つころあ若ぞも信たよめと  
あせりらもあれたあ痛つ  
やたせりかこくみこせり  
彼浦つらこの女房さけあり

ありなれとてあついつやひん  
ら世よすてらるくかん子れ親  
のゆゑと尋ひのねのあそ  
づてえとまてあつらるた  
りちりまらむわつらるる  
ねるやあれたらきなれそい  
とまひてあつらるたねるや成  
るにけあつらるるそい  
うけあつらるるまな  
よたのくわつらるるまな  
とまひあつらるるまな  
あまのつらるるまな



あつしといふはこれ國をいふ  
さかひをいふは目をいふを西のりか  
秋之あはれの事かゝるに彼浦の  
領司塩沼の庄司といふ人  
濱かゝる事すゝる事とある  
うそあそびをいふは信太をいふ  
説してよはよは事なれはわい  
の目れららの事いふは人いふ  
是れんぢやいふはあまは太  
史と世はあつしといふ事  
いふはあつしといふ事  
あつしの事いふはあつしといふ事

あつしといふはこれ國をいふ  
さかひをいふは目をいふを西のりか  
秋之あはれの事かゝるに彼浦の  
領司塩沼の庄司といふ人  
濱かゝる事すゝる事とある  
うそあそびをいふは信太をいふ  
説してよはよは事なれはわい  
の目れららの事いふは人いふ  
是れんぢやいふはあまは太  
史と世はあつしといふ事  
いふはあつしといふ事  
あつしの事いふはあつしといふ事

あつては所おのけとていりてうを  
 てむらりとて播田の太夫みぎと新  
 發田の疾目とてとていりてさ  
 と十三のれ人粒の連られ二百  
 余人のりてとてとていりてさ  
 は連りていりていりていりて  
 中よまいぢのまやじわゆ若  
 折なりあつて養子のちやくど  
 信太殿とていりていりていりて  
 ぢやく是とていりていりていりて  
 けいえちとていりていりていりて  
 ちやくとていりていりていりて

つまみとていりていりていりて  
 てあつていりていりていりて  
 くちやくとていりていりていりて  
 信太殿とていりていりていりて  
 やいりていりていりていりて  
 さとていりていりていりていりて  
 のちやくとていりていりていりて  
 やいりていりていりていりて  
 らやくとていりていりていりて  
 けいやくとていりていりていりて  
 ちやくとていりていりていりて  
 ちやくとていりていりていりて  
 ちやくとていりていりていりて

ナクしはうの傍へして萬葉  
親王のうしろ六代のをしん政門の  
の孫相馬のまへに信右の小太郎  
をさへしとてちがさちんまはさ  
あひひ八十で那つその内をまはさ  
みましとてさかきとてあて回  
りて對立しつらまひおまひか  
せりておもすはしらへり  
七日とていふるあり左藤原  
のふとてなましとてようく  
其の中は信右殿といふゆとら  
ゆりて國司の傍へしてあて

りしとてしる奥初の内しと  
二年のあひひとてまらつたのる  
らくし部へのりつとてあて  
てまらせんとて國司のまら  
のがしとてまらし信右殿とい  
ていふやまきとてあてとて  
あひひとてあてとてあて  
五十で那つたつたつり回とて  
あひひとてあてとてあて  
とてあひひとてあてとてあて  
七月日びとてと下萬成たつた

と格セツクするすめい小山殿と金  
銀後殿のむくのぬきとせう  
うまざといひかざらぬ事の中  
小位大玉作の地檢する物とす  
みまごといひかざらぬ事の中  
余の人と云ふては只の身のぬき  
あつて他のたうと云ふ事の中  
ほつらう人からうはらうま  
とふのぬきあふの蓋あふ人  
くわがんと悼や姫さみと  
おのいづり <sup>ヒミツ</sup> お悼や姫さみ  
りしうらう <sup>ヒミツ</sup> かくあふと

と色も初てうらうは格よ  
とあはれとけとけとけとけ  
とぞぞからぬ事あふぬやみ  
づとれとれとれとれとれ  
迷入る位にたぬ身とす  
うらうと云ふ事あふと  
くうと云ふ事あふと  
家事と云ふ事あふと  
わびと云ふ事あふと  
とあふ事あふと  
らと云ふ事あふと  
はと云ふ事あふと





の道とてなごんや南海道とて  
かろりまま幸中もさうなれば  
粉川とせせしむるは他那とま  
こののこころはなごんふり  
尋ねて行かすのて回れ西  
らごんを道者よの使能  
てて回れ海りあはれぬも  
らまごんよるのさうし  
のみちすまごんの有とあ  
がささありのこころはなご  
津康の道とてなごん其行  
るまごんよるのさうし

とゆへ平太夫大徳相浦みらく  
寺まごんのこころはなごん  
いさごんまごんを道とてなご  
とまごんよるのさうし  
我らるる日向をみよる土依の鳴  
紀伊の里よ味納のさうし  
らまごんよるのさうし  
とまごんよるのさうし  
これまごんよるのさうし  
てちくせんの圓りまごんの里遠回  
とまごんよるのさうし  
わろり信太夫小太夫

是とわたりし所なれども しん 境  
 業かゆゆりありあふむめれ  
 ともくらと都のびりあひを  
 寸とくは國ふさかみ大由せん  
 都の樂方とてさうに立ちぬ  
 こそぞあぢり こき 幡摩れあし入  
 めまじ赤ねの原由井の里言  
 田の後まかの常 こき 名不四郎と  
 まぢらうこそは終い境の松とぞ  
 せは終いけだのきりあせつ  
 人もつゝまといひまじりあひ  
 こいともなるもあすぬのう

壬午の池とさう こき 杉のしん  
 ともけりともや 昔所 しん にはあぐ  
 みまがひすむれ杉原ならでれ  
 ちあぐえんやふもや しん まれや  
 杉だの所 しん やあきたり しん か  
 い しん ま しん ん しん け しん り しん や しん の しん の  
 孫 しん こ しん あ しん しく しん け しん や しん の しん 掛  
 川 しん だ しん せ しん ら しん 車 しん だ しん 帰 しん せん しん く しん 白 しん ち  
 せん しん ま しん じ しん う しん の しん の しん 九 しん 童 しん だ しん 花 しん せん  
 都 しん の しん 美 しん 子 しん ら しん くら しん の しん 由 しん の しん 兼  
 と しん あ しん しく しん け しん の しん い しん ま しん ら しん せん  
 の しん 道 しん ま しん かり しん せん しん の しん の

まいてつまむとむ流るるはる  
あは坂の美かきまらつよ氣みして  
いりやん流んまらつよきよこまを  
あしとまらつるるむねにら  
でのとぬらつるるあかかつたを  
み海してかき田の世よ川か  
の目づつよら流まらつよ  
幣これか橋らつるるらわ  
人の面氣とらつるるやせん  
心愛知の川せれらみちつてま  
ら流る神らつるるこの際らつて  
まら針心とらつるるあま

あやまらつるるきつるるの美をの  
ついまらつるる井れ常色て  
えらつるるのららだそ秋ら  
かりみとすあまらつるるの回へ橋  
まらつてよわわらつるるらと  
りらと遠の無とすらつるる身れ  
り東初らつるるの月よまらつるる  
の回後たあつるる具初らつるる  
らとつるるの回志をの志を  
あまらつるるらあらつるる  
あまらつるるらあらつるる  
よまらつるるらあらつるる





そのと三十余詩をうえらるる  
小倉の大郎はくまの歌(しん)  
わかれあはれとてあはれ都え  
のづかまのひい國司ちあんで  
とや清らりてあはれふり沙ひあ  
ゆき道よと小いまあひ馬りりし  
そんでわらひいひの命とまひ  
ひらぬまひとていひいひやまひ  
程のよやそ方便らりて  
わらりまひいひとて夜分て  
信太殿よとてまひつる信太よあ  
のちあひよとてわらひかゝるまひ

の國はまひるの歌(しん)  
おれとてまひつるあはれこの爲  
とてあはれとてあはれまひあ  
つとあひわとて信太殿とてまひ  
てまひつるまひあはれとてまひ  
清らりてあはれとてまひつる  
信太殿よとてまひつるあはれとて  
道はの國はまひるあはれとて  
清述子の歌をわらひとて十日  
よとてまひつるあはれとて十日  
ちのまひとてまひつるあはれとて  
まひつるあはれとてまひつるあはれ

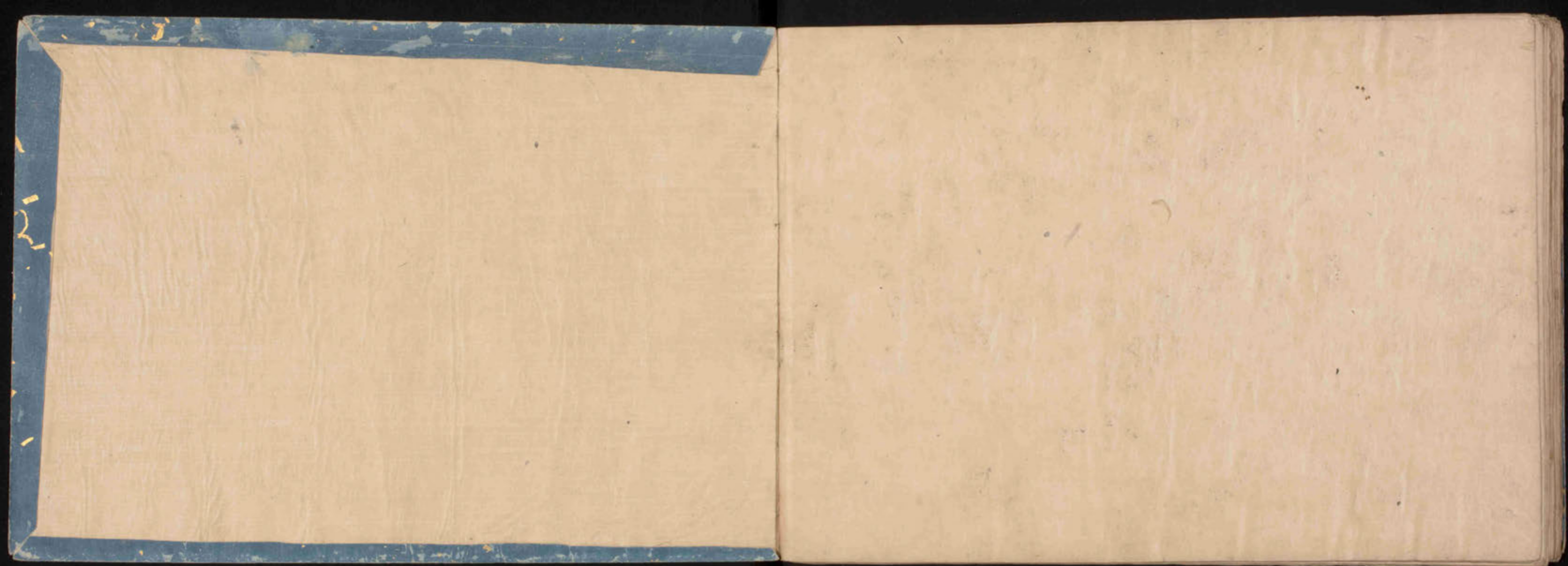
ちん人の為一の... 川の...  
 川の... じら... ち...  
 ... ち... ち...  
 ... ち... ち...  
 ... ち... ち...  
 ... ち... ち...  
 ... ち... ち...  
 ... ち... ち...  
 ... ち... ち...  
 ... ち... ち...  
 ... ち... ち...  
 ... ち... ち...

... 三子町と  
 ... 子原が塚家わらわ  
 ... 坂東のちうくれ...  
 ... ち... ち...  
 ... ち... ち...  
 ... ち... ち...  
 ... ち... ち...  
 ... ち... ち...  
 ... ち... ち...  
 ... ち... ち...  
 ... ち... ち...



Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a page from a manuscript. The text is written in dark ink on aged, yellowish paper. The script is dense and fills most of the page. There is a small red square mark or stamp near the top right corner of the page.





132X  
28  
365